修訂

大日本國語辭典

新裝版

文學博士　松井簡治
文學博士　上田萬年
共著

全

東京
冨山房發行

修訂版及び增補卷の刊行に就いて

大日本國語辭典の稿本の完成したのは、明治の末年であつた。それを愈々印刷に附し、第一卷を公刊したのは大正四年で、以下第二・第三・第四と逐次刊行を終つた。其の當時、自分の考へでは、此の後、何人が同樣の編纂を思ひ立たれても、自分の經驗から推せば、尠くとも十年以上の歲月を要するであらう。從つて其間多少なりとも、斯界の參考になれば、本辭典刊行の使命は達せられたと。

爾來、今日まで二十餘年、我が國、學術界の進展は著しく、各種の百科辭典の刊行があり、專門に涉る特種の辭典が多數、世に提供された。然しながら一般國語辭書は、僅かに數種の刊行を見たに過ぎない。固より其の中には相當見るべきものもないではないが、多くは本辭典に採錄した語彙を基礎として、多少の加除修正を施したに過ぎないと言つても、誣言ではないと思ふ。根本的に多數の典籍から語彙を蒐集し、整理するといふ基礎的作業に努力されたと見るべきものは、殆ど見當らない。

大槻文彥博士は斯界の權威であり、先覺者であることは言を俟たない。博士が大正の始めより古稀に近き高齡にも拘らず、言海を增訂して大言海の編纂を企圖された事を聞き、自分は大いにそれに期待したのであつたが、令兄大槻如電翁の序文にも記された如く、不幸にして「ア・カ・サ」の三行を完成しただけで、中途、長逝された事は惜しみても餘りある事である。

自分は七八年前、老齢の故を以て致仕したが、幸に健康であるから、老骨を捧げて國家のため何事か寄與しようと決意した。それには多年、手馴れた仕事でもあり、前述の如く本辭典出版後の國語辭書界の現狀に鑑みて、本辭典を修訂增補して完成を期する事が、最適の事業であると考へた。本辭典刊行後、各方面より過褒の辭を寄せられると共に、缺陷に就いて示教を受けた事も一二に止まらない。又其後の國語學界の研究進歩により、訂正を要する箇所も相當發見したので、彼此參照して修訂を行ふ事にした。

又、本辭典の凡例に述べた通り、編纂當時、豫備事業として、上古・中古・近世に渉り、主要な典籍中から語彙を拾集して、五十音索引を作つたが、江戸時代は餘り多數な書であるから、已むを得ず十數種を選擇するに止めた。これは自分として最も遺憾に思つてゐた點である。それで今回は主としてこの方面の語彙集錄を目標とし、別冊の增補を行ふ事にした。

如上の修訂及び增補の事業は、獨力で短日月の間に完成する事は容易なことではない。然るに幸にも實弟吉見謹三郎が、自分を助けて編纂に校正に終始努力し、事業の遂行に當つてくれたので、印刷技術上、煩瑣な整理を要する修訂版の完成、及び七八萬の新語彙の蒐集、原據の揭出、並に解說を施した增補卷を、ほゞ脫稿する事を得た。猶この增補の卷中には、最近、日支事變以來、新聞に雜誌に簇出した幾多の新語中、永久性ありと認めたものをも收錄する事にした。固より是等の語は何分にも多數であるから、遺漏は免れまいと思ふ。

本辭典に寄せられた芳賀博士の序文に、進歩して行く世間には、國語そのものの中にも絕えず變遷が行はれて居るとあるが、特に法律語、又は官制の如きは、この二十餘年

間に甚しい變化が認められる。それを本編中で一々訂正するのは、却つて混雜を來たす恐れもあるから、修訂版は大體、舊版のまゝにし、其後、著しく變遷したものだけを增補卷中に揭出し、猶ほ追加の語彙も、悉く其れに收錄することにした。

本辭典は上田博士との合著ではあるが、同博士は當時、頗る多忙の身であられたから殆ど一回の閲覽をも請ふことが出來なかつた。故に本辭典に誤謬・缺陷があれば、全く自分一人の疎漏で、博士の責任ではない。然し書肆との交渉、其の他に就いて、博士は絕えず斡旋の勞を執られたのであるから、博士なかりせば、或ひは本辭典の刊行其ものも出來なかつたかも知れない。博士が本修訂版、並に別卷增補の刊行を見るに及ばずして、一昨年、逝去せられたことは、自分として最も遺憾に思ふのである。

芳賀博士は本辭典の編纂に就き、終始、同情を寄せられた事は、同博士の序文に見える通りである。今や博士は墓木已に拱なりといふべき、歿後十三年になつた。

又、本辭典新刊の當時、特に厚意を寄せ、序文を認められた三上參次・服部宇之吉兩博士、並に刊行に發賣に心を碎かれた富山房社長坂本嘉治馬君、何れももはや此の世の人ではない。自分も既に喜字の老齡に達した。指折り數へれば、本辭典編纂着手當初から、四十餘年になる。往時を追懷し、刊行新に成つた机上の修訂本を撫して、無量の感に堪へない。

昭和十四年九月

松井簡治識

拮据經營十五年の久しきに亘りて、國語を蒐集し、之に解釋を加ふること二十餘萬語、茲に此の一大辭典として世に公にし、國民をして永く其の恩惠に浴せしめんとす。洵に藝苑の一盛擧と云ふべし。偶ま之を以て、大正昭代の初を飾るを得るは、抑も何等の慶事ぞや。而して此の偉業を成しし人の、我が親友上田萬年、松井簡治の両君なることは、予の最も喜び且つ誇りとするところなり。

新撰字鏡、和名類聚抄等の昔より、諸種の節用集、和訓栞、雅言集覽の時代に至るまでにも、文字國語に關する著述は少しとせず。明治の大御代となりては、字書辭典の公にせられしもの特に多し。辭書の多少は、邦國の文野をトふべき計器とも云はるゝことなれば、十室の邑にも庠序の設けあり、三戸の村にも絃誦の聲を聽く今の盛世に在りては、さもあるべきことなるべし。今や大日本國語辭典は此の類の書のうち、最も新らしきものとして世に出でたり。思ふに、最も新らしきものは、最も進歩したるものなるべし、又、最も完備せるものならざるべからず。況んや、両君學問は博く、識見は高し、之に加ふるに長き年月の間、殆んど精力を此の書に盡し、司馬溫公の故事にも似たるものあるを知れる予は、當然一大産物の出づべきを豫期したり。假印刷の成りて之を示さるゝに及び、果して予の期待するところに背かざるを認め、先づ、其の採輯せられたる語彙の廣汎なるに驚きたり。記紀、萬葉にあらはれたる古語、紫清の二書、今昔、土佐等、日記物語に見えたる中古語、源平盛衰記、太平記、其外軍記謠曲等の近古語より、江戸時代の隨筆小說類の近代語に及び、さては、新聞雜誌に用ひられて、日々予輩の目に觸るゝ現代語に至るまで、最も博く收錄せられたるのみならず、漢籍佛典以外に見えたる外來語をも、網羅せられたる事卽ち是れにて、本書特長の第一と數ふべきものなるべし。啻に語彙を擧ぐるに止まらず、之を骨子とせる熟語を說明し、又難句、俚諺、格言等をも收められたれば、所謂、熟語故事辭典の用をも兼ねたること、是れ特長の第二

なるべく、廿餘萬といふ驚くべき語數に上りたる事も、さてはと首肯せらるゝなり。又、語彙熟語の解釋の叮寧にして、しかも冗漫に流れざるは、第三の特長として、編者の技倆を窺ふべし。明かに語彙熟語の出典を擧げて、其の書名のみならず、部門卷數をも示されたるは、著述として最も信用を措くに足るべく、第四の特長として、編者の深切を見るべし。語句の解釋に數種の說ありて、古來聚訟決しがたかりしものも、編者は先づ其の優良なるものを採り、次に他の說を擧げて參考に供せられたるは、第五の特長として編者の識見を見るべし。既に此の五つの特長を認めたれども、尙意地惡くも、試みに古記錄に見えたる二三語を搜索せしに、幸に檢出し得て、編者の用意の此の邊にも及びて、採輯の最も該博なるに敬服せり。

篤學にして無名の士の著書は、予は喜んで之を世に推奬す。されども主義としては、他人の著書に序跋を加ふるを好まず。蓋し、其の書の平凡なる場合には、或は、著者をして羊頭狗肉の譏を受けしむることあらん。是れ予の忍びざるところなり。若し又良書ならば、予は佛頭に糞を塗り、錦繡に泥を點ずるの笑を招くことあらん。是れ亦予の堪へ能はざるところなればなり。顧ふに、編者は學界の耆宿なり。此の人にして此の書を公にせらるゝことなるに、尙予に一言を徵せらるるは、其の何の意なるかを解するに苦む。されども、予の兩君に於けるや、親交既に三十年、情誼の如何にしても辭すべからざるものあり。乃ち感ずるところを記して需に應じ、公の爲めには此の大辭典の出でしを慶し、私の爲めには自から勗むるの資となすと云ふ。

大正四年九月

文學博士　三上參次識す

神州は古より言靈のさきはふ國と稱す古歌謠辭に發する所祝詞宣命に著はるゝ所流調清麗にして文辭自ら富めり漢籍の渡來するに及んで字音亦傳はり音讀訓讀並び起りて辭數語彙漸く繁多となり留學の書生求法の僧侶多く隋唐に赴きて彼の文明を齎し歸り學問文章蔚然として勃興せり是時に當りて朝廷の文書記錄專ら漢文を用ひ士大夫皆詩文を能せしかば漢文の字句多く世に行はるゝに至れりかくて軍記謠曲の中には巧に漢書佛經を引用し漢語を混ずること益々著しく江戸時代には和漢混淆文盛に流行し近松馬琴等の戲文小說より日常の尺牘に至るまで自在に漢語を用ひ耳に入りて毫も佶倔聱牙の礙なく音訓相和して頗る自然なるを覺ゆ歐米の交通開けてより西洋文物の輸入と共に外國語の傳來せるもの亦少からず百川の流れて海に朝するが如く國語漢語の外朝鮮印度馬來西洋諸國の外來語等並び行はれ竟に渾然同化して華麗富贍なる現代語を作成せり之を記紀の古語に較ぶれば語彙の豐儉雷に天壤のみならざるなり然るに從來の國語辭典に在りては專ら大和言葉のみを選びて其他に及ばず或は兼ねて漢語を採錄せるものあれども辭數甚多からず以て輓近長足の進步をなせる國語の辭書としては到底不完全なるを免れざるなり我友上田松井兩君深く之を慨し夙に辭典の編纂に從事し博く古今雅俗の國語漢語外來語を收めその辭數二十餘萬の多きに達せり現行國語辭書の僅に三四萬若くは七八萬語を載せたると同日の論に非ず誠に神鳳の九霄に叫んで群鳥啼を止め驊騮高く嘶いて萬馬皆瘖するが如し抑々十年三千六百五十日假りに一日平均五十辭を解說すともなほ十八万二千五百に過ぎずしかも兩君現に劇職に居り敎授の餘假を以て拮据纂輯夜以て日に繼ぎ十有

五年一日の如く終に空前の大辭典を完成せるはその精力絶倫なるに非れば何ぞ能く此に至らんや要之朗詠集を始め軍記謠曲類に著はれたる漢語は殆ど之を網羅したるのみならず佩文韻府駢字類篇等の支那辭典より國語化したる熟語を博く採取せしこと並びに新撰字鏡類聚名義抄字鏡集に載せたる訓義は勿論伊呂波字類抄節用集下學集運歩色葉集に見えたる漢熟語をも盡く收錄せしことは漢文學上より見たる本書の特色にして殊に出典の精確を期せんが爲に主要なる書冊につきて語辭の五十音索引を作製し例へば論孟詩書左傳史記等の卷數篇名を明記して原本檢索の便に供したるはその用意周到を極め學徒の最便とする所なり若夫両君の學問の該博にして識見の超邁なるは世既に定論あり本書の學界に貢献する偉大の功績に至りては我輩の贅言を要せざるなり思ふに中興以來五十年東西両洋の文明を會萃し文物典章燦然として備はり爛漫たる新時代文學の漸く起らんとする時に當り本書の發刊を見たるは蓋氣運の先を啓くものといふべし往時言海の成るや西村茂樹翁は之が序を作り以て荆棘を芟る業となし更に道路を作る人を後世に期待せり爾年三十年にして本書出で古今の國語を集大成せるに庶幾し兩君の如きは所謂道路を作る人に非ざるか時會々

今上登極の吉辰に際し此の如き浩瀚なる編著を得たるは實に昭代の盛事にして以て曠古の大典を千秋に記念するに足らん

大正四年八月

文學博士　服部宇之吉

十年一昔といふことを思ふと、上田松井の二君が國語辭書の編纂に著手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晩餐會に招かれて打興じたのはつい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで人の子の母となつて居る。短いやうで長いものである。今や其の第一卷がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極りがない。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進步發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年では無かつた。二君の編纂事業はかういふ中に、徐々と其の工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘出されて、選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬といふ古語や新語は幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く一月二月三月四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。傍から見れば捗の行かぬことは齒痒いやうで、何時方のつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦は間斷なく此の間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、其の進步は遲いが、其の成果

は確實であつた。かくて粒粒積上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに編纂の稍緒に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻となく進水式に浮び出たのであつた。

學者の仕事はじみである。目覺しく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たび其の室に入つて、山成す材料を見上げるものは、何人も其の難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業では無くして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とは言はれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に賴らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狹い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大に增加したのを祝賀する人は、之と同時に數隻の巡洋艦位で滿足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に採りての立派な强みになる。此の一大產物が、堅忍不拔な二君の手によつて成就せ

られた事は、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感ずる所以である。この十年は國語界に於ても亦無意味な十年では無かつたのである。

學者の事業はいつも世間と沒交渉のものでは無い。專心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進步して行く世間を、一日も餘所に見て居る譯には行かぬ。十年一昔の間には、國語其のものゝ中にも絕えず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易の業では無い。靜寂な編輯室は紛糾した實社會と、常に相往來して居るのである。

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は今更述べるには及ばぬ。後世の人は必ず之を明治時代に企てられて、大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の滿足と喜悅を察知すると同時に、今か今かと十餘年を待暮らした同友とともに、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮べようと思ふのである。

大正四年九月

芳賀矢一

しるす

凡例

一　本書に收めたる語彙

一　本書には上古語・中古語・近古語・近代語・現代語其の他普通の學術專門語、及び外來語の通用語となれるものは悉く之を收めたり。漢語の國文學の上に表はれたるものも廣く之を收拾して讀書の便に供せり。方言は古書の上に表はれたるもの、及び現在東京京都地方に行はれたるもののみを取り、諸國のは、他日別に方言辭書編纂の時を期し、今は之を省きたり。

一　地名・人名・書名等の固有名詞は一切之を取らず。但し傳說に基きたる神佛の名稱のみ之を收めたり。

一　熟語は熟して一義をなせるものを主とし、又はるかぜ(春風)・あきやま(秋山)の如き、秋・山、又春・風と別別にいふ時と、熟していふとは自然の音調も異なれば、其等をも熟語として收めたり。

一　句は首部の語下に收めたり。あめのあし(雨脚)は雨の下に、かんばのらう(汗馬勞)は、かんば(汗馬)の下に收めたるが如し。但し以心傳心・神出鬼沒の如く、實際は句なれども熟して一語をなしたるものは首部に揭げ、句として之を出せり。又一粒萬倍・一唱三嘆の如く、一粒又は一唱等、首部に揭出すべき語なきものも亦然り。

一　古今の書に見えたる成句及び俚諺・格言等は最も多く收拾し、之を首部の語下に收めて解釋及び出典を擧げたり。

二　語彙の蒐集につきて本書の取りたる方法

一　本書編纂の初めに當り、重なる國書數百部を撰びて語句の五十音索引を作り、古來用ひ來りたる國語の大數を知りて語彙の遺漏なきを期せり。又其れに據りて語釋の正確にして誤謬なからんことを圖り、且つ其れに基きて出典を揭げ、所謂孫引なるものを避けたり。

一　現代語は新聞・雜誌につきて蒐集し、相場表の特殊語に至るまで悉く之を收めたり。然れども、近來新語は日に月に續出して底止するところを知らず、悉く之を網羅して一の脫漏なきを期せんこと、固より人力の能くすべきにあらず。看者之を諒せよ。

三　假名の用法及び其の排列

一　國語・外來語の別なく、すべて平假名を用ひ、五十音の順序によりて排列し、撥音の「ん」は最終に置けり。

一　假字遣は歴史的假名遣を用ひ、別に檢索者の便をはかりての發音索引及び漢字畫引索引は、今回の新裝版には之を省略せり。

一　首部の語句に於ける促音の「つ」は七號活字、拗音の「や」又は「よ」の類は六號活字として他と區別し、排列の順序は普通のつ又はや・よと同位置とせり。かーきー・がーぜの如き長音符ある語は、一括して「か」の如き單音の語の次位に列ね、次にかあ・かあいと次第せり。又清音・濁音の場合には清音を先とし、所謂半濁音のぱ行を其の次とし、濁音を又其の次に置けり。

一　外來語のああち・かあきいの如きは、「あーち」・「かーきー」の如く長音符を以て之を記せり。

一　假字遣の古來決定せざるものは、雙方に掲げて其の由を記し置けり。

四　文法上の注意及び其の排列

一　動詞・形容詞・助動詞は悉く終止法にて之を擧げ、動詞は其の下に自動・他動の別及び活用の種類、即ち四段・上下二段・上下一段及び變格等、形容詞は第一形容詞・第二形容詞を示せり。助動詞も亦之に準ず。

一　あきらか・おだやか・しづかの如き副詞の語根は、其のまま副詞として之を擧げ、特に「に」又は「なり」を加へず。

一　漢語の多くは用方によりて、名詞となり動詞となり副詞となりて、品詞の限定し難きものあり。其等は特に品詞の名を省きたり。

一　漢語に、す(爲)の動詞を添へて動詞とせるものは、善く熟して一語の如くなりたるものに限りて、之を擧げたり。

一　形式の同一にして文法上異なりたる官能を有する語ある時は、別項に示したる文法略符號の順序によりて排列し、猶動詞にて同形の語ある時は、自動を先とし他動を後にし、更に四段・上二段・下二段・上一段・下一段・變格の順序に之を排列せり。

一　名詞其の他の語にて同形のものあるときは、古語を先とし、新語・方言・漢語・外來語の順に之を列ね、更に其の中に就きて動物・植物等の特殊語を後に擧げたり。

五　語釋に就きての注意

一　語釋は平易簡明を主として冗漫に流れざらんことを務めたり。書き方は文語によりたれども、場合によりては口語を用ひたり。要するに看者をして一目其の意義を了解せしむるにあり。

一　語釋の下には成るべく同意語を列

記し、語彙を應用せんとするものの便に供せり。

一　語釋の古來諸家の說異同ありて決し難きものは、先づ編者の適當と認めたるものを擧げ、次に異說を揭げて參照に供せり。

一　說明の便宜上、一語の下に他の語を幷せ說きたるときは、各條の下に何何を見よと記せり。又或語より轉訛したるものは本語の條下に說明し、一方には何何を見よと記して、其の由來する所を知らしめたり。

一　說明の文中に著れたる語は、遺漏なく各條の下に揭出せんことを務めたり。例へば植物などにて禾本科若しくは葉尖・葉緣等の術語を用ひたる場合には、必ず其の語を各條に揭げて說明したる類なり。

一　語源は古人の說採るべきもの少く、將來猶研究の上ならでは不明のもの多く、妄に不確實の說を擧ぐるは却つて人を惑はす基なるべければ、本書には成るべく確實にして且つ語釋に必要なるもののみを記せり。他日別に語源辭書を編纂して之を補はんとす。

六　漢字・漢語其の他外來語に就きての注意

一　毎語の下に漢字・漢語を標出せるは、一は同語の並列したる場合に一目して差別を知らしめ、一は語源を知らしむる便としたるものなれば、專ら一般通用の漢字・漢語を採りて、必しも其の雅俗を問はず。

一　漢字音の一般に行はれて慣用音となりたるものは、原音によらずして慣用音に從へり。例へばけきえん（喫烟）をきつえん、きくしやう（畜生）をちくしやう、しゆにふ（輸入）をゆにふとせるが如し。

一　漢語には漢音・呉音の別あれば、本書を務めて普通一般に行はれたるものに從ひ、両樣に用ひられたるものは各條に擧げたり。

一　漢字・漢語の字音より來りたる語には標出せる漢字の頭に〜なる符號を施せり。例へば「かいぐわい〔海外〕」・「けんさく〔檢索〕」の如し。

一　植物等に充てたる漢字は普通植物學に用ひたるものを採れり。例へば「れんげさう」を蓮花草とせずして紫雲英とし、「うまごやし」を馬肥とせずして苜蓿とせる類なり。編者は寧ろ蓮花草・馬肥と通俗にするを至當とすれど、現今の教科書に前者を採用したれば看者の便を圖りて暫く之に從へり。

一　外來語には原語を插記して其の由來する所を知らしめ、漢語は國書

に表はれたる出典を掲げ、次に最も古く漢籍に見えたる出處を擧げて基く所を知らしめたり。

七　出典につきての注意

一　出典に擧げたる書名は、單に萬葉・源氏・枕草紙若しくは左傳・史記など擧げたるのみにては、浩瀚なる書冊中、看者は檢索するに由なく、殆ど無用の長物たるに過ぎざれば、本書は最も力を之に用ひ、古事記・日本紀・萬葉集等は卷數、其の他の歌集は卷數又は部立の名、東鑑其の他日記の類は卷數及び年月日、軍記は卷數及び其の條項、漢籍にては論語・孟子の類は篇名、左傳は何公何年、史記・漢書の類は何何傳と細記し、看者をして容易に原書に就きて搜索する便に供せり。

一　法律語の出典は、必ず何法第何條第何項と一一條項を掲げたり。

一　出典は原書のままにて、妄に之を改竄せず。但し古事記・六國史等に見えたる歌、及び萬葉集のみは、本語に關する部分のみ原書のままにし、他は讀み易からしめんがため假名交りに書き改めたり。

一　出典に引きたる文の餘り長きに渉りたるものは、中略として必要の部分のみを掲げたり。但し和名抄の如きは、和訓に關するもののみ取ること多ければ、一一に中略と記さんは煩しければ省けり。

一　出典を擧げたる文中に古書の異同あるものは、異本の符號卽ち(イ)として之を擧げ、妄に之を取捨せずして看者の參照に便にせり。

一　萬葉集の如き、諸家の說によりて訓讀に異同あるものは、萬葉略解を本とし、萬葉古義其の他諸家の訓には、一一古義或は誰某の訓など記し、略解のみは特に之を記さず、両說の決し難きは各條に之を擧げ、妄に之を改削せず。

八　句讀及び送假名等の注意

一　散文には、句讀を施したり。但し法律文の出典には慣例に從ひて句讀及び假名の濁點を省き、歌の短歌のみは、誤解を生じ易き場合の外、上句と下句との間に施せり。

一　送假名は誤讀を防がんがため成るべく多く之を施したり。

一　發音の振假名は、音のままならずして轉呼して發音するものにのみ之を附す。例へば「おもふ(思)」・「がふけい(合計)」・「かへす(返)」の如し。

九　挿畫に付きての注意

一　挿畫は普通の所謂飾畫を省き、說明上言辭を以て其の意を盡し難きもののみを擧げたり。

略符

一 品詞

(名)	名詞
(數)	數詞
(代)	代名詞
(自動)	自動詞
(他動)	他動詞
(形)	形容詞
(連體)	連體詞
(助動)	助動詞
(副)	副詞
(接)	接續詞
(助)	助詞
(感)	感動詞
(助數)	助數詞
(枕)	枕詞
(接頭)	接頭語
(接尾)	接尾語

二 活用

四	四段活用
上二	上二段活用
下二	下二段活用
上一	上一段活用
下一	下一段活用
變	變格活用
(形一)	第一形容詞の活用
(形二)	第二形容詞の活用

三 科學

【語】	語學
【法】	法律
【經】	經濟
【商】	商業
【哲】	哲學
【心】	心理學
【宗】	宗教
【倫】	倫理學
【論】	論理學
【動】	動物學
【植】	植物學
【生物】	生物學
【鑛】	鑛物學
【醫】	生理學・解剖學
【天】	天文學
【地】	地文學・地理學・地質學・岩石學
【數】	數學

四 書名

勢語	伊勢物語
伊呂波字類	伊呂波字類抄
宇津保	宇津保物語
運步色葉	運步色葉集
榮華	榮華物語
謠	謠曲
落窪	落窪物語
狂言	狂言記
禁祕抄	禁祕御抄
舊事紀	舊事本紀
玄玉	玄玉集
源	源氏物語
現六帖	現存六帖
盛衰記	源平盛衰記
江次家	江家次第
江次第抄	江家次第抄
六帖	古今六帖
著聞	古今著聞集
記	古事記
今昔	今昔物語
藏玉	藏玉和歌集
狹衣	狹衣物語
三十二番歌合	三十二番職人盡歌合
三十六番歌合	三十六番職人盡歌合
散木集	散木弄歌集

七十一番歌合	七十一番職人盡歌合		
拾玉	拾玉集		
十訓	十訓抄		
拾遺員外	拾遺愚艸員外		
釋紀	釋日本紀		
續紀	續日本紀		
續後紀	續日本後紀		
字鏡	新撰字鏡		
新撰朗詠	新撰朗詠集		
新六帖	新撰六帖		
住吉	住吉物語		
雪玉	雪玉集		
節用	節用集		
曾我	曾我物語		
續詞花	續詞花集		
竹取	竹取物語		
堤中納言	堤中納言物語		
天德歌合	天德內裡歌合		
取替	とりかへばや物語		
後紀	日本後紀		
神代紀			
神武紀	日本書紀		
仁德紀			等
靈異記	日本靈異記		
濱松	濱松中納言物語		
夫木	夫木和歌抄		
平家	平家物語		
平治	平治物語		
保元	保元物語		
永久百首	堀河次郎百首		
堀河百首	堀河太郎百首		
枕	枕草紙		
萬	萬葉集		
萬代	萬代集		
壬二集	壬生二品集		
名義抄	類聚名義抄		
類本字鏡	類從本新撰字鏡		
吳竹集	和歌吳竹集		
朗詠	和漢朗詠集		
和名	和名類聚抄		
其の他			

二十一代集は和歌集を省きて古今・後撰・拾遺などとす。

延喜式・大寶令は四時祭式・祝詞式・中務省式、職員令・東宮職員令・田令などとす。

家集は姓を省き名と集の字とをつく。躬恒集・順集などの如し。但し曾丹集・壬二集・金槐集・山家集の如く特稱あるものは之を用ふ。